

「移ろはせ花」 フレーム

別れも含めて、和。

私はときおり生け花をする。
生きている花を改めて
部屋の中に生かし直す矛盾には緊張感があり
一人暮らしの部屋に生命の張りが宿る。

しかしやがて、花は枯れる。

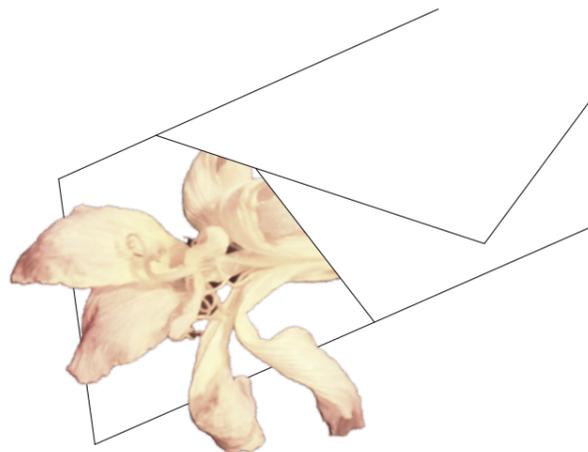
どうお別れすればいいのかと悩む。
生けるという「出会い」の所作には
細かく名称が与えられ、型があるが
「別れ」にはそれがない。

でも「別れ」の精神はたしかにあるようだ。
昔は塩をかける人がいたり
現代はラッピングをして捨てる人がいたり
それぞれの仕方で確かに感謝を伝えている。

「別れ」は生け花のあとの負の時間ではない。
花器が空っぽな時間も含め、
季節の流れを感じて一体となり
内省して心の調べを聴く大事な時間。
まだ型も名もない、
でもたしかにある和の時間。

「出会い」と「別れ」を含めた繰り返しの
全体を、「移ろはせ花」と名付けた。

具体的なモノやコトではなく、
和の精神が「移ろはせ花」である。



「移ろはせる」とは、

移ろいを人の記憶のなかにも流すということ。

敷地は岐阜県高山市。

古い町並みの観光客が近年激しく増えている。

周辺の商業・宿泊業も盛んになり、建築物のリノベーションや建て替えが進んでいる。

私は、地域の住人のこんな声を盗み聞きした。

「ここ何が建ってたっけ。にしてもお店いっぱいできるねえ。」

「移ろはぬ」観光地に影響され、「移ろふ」景色があるが、それが同時に

「移ろはぬ」観光地に影響され、記憶に残らず消えていく景色でもあるのが現状である。

私はこの周辺のまちの移ろいを、住人や観光客の記憶にも流しすことで
自分とまちが一体となり調和するひとときを散りばめたいと思った。



古い町並み 「移ろはぬ」景色という魅力



すこしはなれたまち 「点」で建つ店に人が寄る 記憶の断片を残さず移ろふ

私は、まちを構成する様々な要素の境界にまたがる木製フレームを提案する。

ピクチャーウィンドウとして「地」のまちに視点を与える。

人の行為を誘発することで、まちが記憶に絡んでいく。

建物との別れや出会いは、この「移ろはせ花」フレームの使われ方の変化に気付きながら、
ゆっくりと意識されていくことになる。

また SNS における「エモい」的共感を求める発信を誘発し、記録にも残っていく。

「エモい」は「移ろはせ花」の精神なのかもしれない。

